



**JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1**

Tuesday 3 May 2005 (morning)  
Mardi 3 mai 2005 (matin)  
Martes 3 de mayo de 2005 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の I (a) の文章と I (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。(コメントリーを書きなさい。)

I (a)

回送電車

堀江敏幸

5 もう五分ほども、車二台分の幅しかない踏切で足止めを食っている。新宿を起点とするこの私鉄沿線にはまだ多くの踏切が残されていて、ラッシュ時などのぼりくんだりと同時に何本も重なって遮断機が下りつばなしになり、通行人はいつまでたつても鳴りやまない電気の警鐘を耐え忍ばなければならないのだが、

10 そうこうするうち歩行者だけでなく前ハンドルのかごにスーパーの袋をいっぱい詰めた自転車やら配送用の小型ワゴン車やらが一挙に押し寄せて人と人のあいだの距離がむやみと縮まり、戸外でも強い匂いを放つ香水をつけた女性のうなじやクリーニング店の札がついたまま折れ返っているおじさんのコートの襟首が目にはいつてなんとなく気分が鬱屈してくるうえに、ふだん公衆の面前でそんな勇気など出したことのない人々がひとりふたりと遮断機を持ち上げて中腰で無法地帯に侵入し、前のめりに砂利道を駆け抜けるというメキシコ国境さながらの緊迫した劇を追うことになる。

15 踏切には、たとえば都心のスクランブル交差点などとは明らかに異質な怨念が渦巻いている。遊びに出かけるのではない真面目な勤め人の行く手をなぜこうも無慈悲にさえぎるのか。その怨念を増幅させているのはおそらく競走馬のゲートに相当する竈橋様のバーの存在だろうが、線路の両側で身動きがとれなくなっている私をふくめた数巨の人間の神経をさかなでするのは、時々、こちらをあざ笑うかのようひときわゆつくりと滑っていく乗客のない車両、すなわち回送電車である。(中略)

20 私は以前からこの回送電車にそこはかたない憧憬を、もつと云えば、ある同胞意識に似た感情を抱きつけてきた。白昼、蟻のごとく群がる人間どもを睥睨しつつ、国王を乗せるリムジンのように威風堂々と流れていくかと思えば、夜間、車内灯をつけたままのガラス窓に、ホームに群集する疲弊しきつた連中の顔を反射させながら幽霊みたいに目の端を泳いでいくこの電車だけが身にまとっている不思議な空気を、理由がよくわからないまま好意的に受けとめてきたのである。ついですがたこの踏切にも、直立不動の人形を押し立てた真昼の亡霊がことのほかゆるやかに通り過ぎて、群集心理に呑み込まれた私の胸の内を複雑にえぐっていったのだが、そもそもこの回送電車とはいかなる存在なのか。周知のように、書店で売られている時刻表には、整備のため車庫に向かう列車のダイヤなど記載されていない。といって貨物専用路線を走るわけでもないから、時刻表は沈黙の電車を計算に入れなければ編むことができないはずで、つまり回送電車とは、私たちの眼前にまぎれもなく存在しつつ、同時に現実と非現実のはざまをすり抜けて

25 しまう不可視の列車なのである。

30 いつだったかこの踏切の管轄者である某私鉄のサービス課に、限られた区間でかまわないから回送電車のダイヤが入手できないものかと問い合わせしてみたところ、意外にも、というか妙に得心のいく応えが返ってきた。運輸部が編成する回送電車のダイヤは部外秘文書だと言のうだ。しかし私が例に挙げた有限の線分上を平日に走る回送の本数は親切にも教えてくれて、驚くなかれその数は、上下線合わせて七十本近くにのぼっていた。下りの主体は特急回送で、全体では六、七割を鈍行の回送が占めている。純粋に数た

け見ればこれはかなりの密度ではなからうか。少なくともこちらの予想をはるかに上まわる数値ではあつて、役割の重要性を理解するにじゅうぶんな情報だったのだが、回送電車を前にした私の奇妙な同胞意識の由来がそれで解明されたわけではなかった。

35 ところが目の前を横切つていく空つぼの車両を惚けたように眺めているうち、ふと気づいたのだ。回送電車の魅力は、部外秘のダイヤグラムに沿った隠密行動の気高さと裏腹に、急ぎの客にはなんの役にも立たず、しかも役立たずだと思われることじたいに仕事の意義があるという、考えてみれば至極当然の逆説に依拠しているのではないか。誰にも関心をもってもらえぬまま決められた時間に敷かれたレールのう  
40 えを滑つていく、いわば義務づけられた余裕でも呼ぶべき甘美な倒錯がここにはあるのだ。こうした倒錯をもたらす要因のひとつは、前も後ろもなく、ときにはまったく異種の身体をあいだに挟むことも可能な、つまりタクシーやバスには望むべくもない肯定的な規制である、一見不自由そうな鉄路だけに許された  
45 双方向性にあるだろう。

特急でも準急でも各駅でもない幻の電車。そんな回送電車の位置取りは、じつは私が漠然と夢見ている文学の理想としての、《居候》<sup>いこう</sup>的な身分にほど近い。評論や小説やエッセイ等の諸領域を横断する散文の呼吸。複数のジャンルのなかを単独で生き抜くなどという傲慢な態度からははるかに遠く、それぞれに定められた役割のあいだを縫つて、なんとなく余裕のありそうなさぶりを見せるこの間の抜けたダンディズムこそ《居候》の本質であり、回送電車の特質なのだ。実際、私がこれまでに上梓<sup>じょうし</sup>したささやかな本たちは、いずれも書店では置き場のない中途半端な内容で、海外文学評論の棚にあるかと思えば紀行文の棚に投げ入れられていたり、エッセイや詩集の棚の隅に寄せられているかと思えば都市計画の棚に隠されている  
50 こともあるといつたぐあい、書店という特定の路線にあつてなお分類不能な、まさしく回送電車的存在だったではないか。私にとって、ひとつのジャンルを遵守した書法の選択は、回送電車に人を乗せて走れと要求するようなものなのだ。乗客の不在ゆえに模型よりも軽やかな電車が移動していくときの、一瞬の空気の弛緩にかぎりない愛着を覚えずにいられない者にとっては、回送電車こそ、永遠に見つからない逃避への道を探つている寂しい漂白者の似姿なのかもしれない。

(堀江俊幸『回送電車』二〇〇〇一年)

(注) 堀江俊幸(一九六四-)小説家、評論家。フランス文学者。代表作に、「熊の敷石」、「雪沼とその周辺」などがある。

- 回送電車 乗客を乗せずに、空車で他の場所へ電車を動かすこと。
- 蝟集する 一時に一ヶ所に多くのものが寄り集まること。
- 居候 他人の家に世話になり食ぐらせてもらうこと。
- 上梓 図書を出版すること。

1  
(b)

兵士の歌

鮎川信実

獲<sup>か</sup>り入れがすむと

世界は何と廣野に似てくることか

あちらから昇り むこうに沈む

無力な太陽のことばで ぼくにはわかるのだ

5 こんなふうにおわるのはなにも世界だけではない

死はいそがぬけれども

今はきみたちの肉と骨がどこまでもすきとおつてゆく季節だ

空中の帝国からやつてきて

重たい刑罰の砲車をおしながら

10 血の河をわたつていつた兵士たちよ

むかしの愛も あたらしい日付の憎しみも

みんな忘れる祈りのむなしさで

僕ははじめから敗れ去つていた兵士のひとりだ

なにもよりも おのれ自身に擬する銃口を

15 たいせつにしてきたひとりの兵士だ

おお だから……

ぼくはすこしずつやぶれてゆく天幕のかげで

膝をだいて眠るような夢をもたず

いつわりの歴史をさかのぼつて

20 すこしずつ退却してゆく軍隊をもたない

……誰もぼくを許そうとするな

ぼくのほそい指は

どの方向にでもまげられる関節をもち

安全装置をはずした引金は ぼくひとりのものであり

25 どこかの国境を守るためではない

勝利を信しないぼくは……

ながいあいだこの廣野を夢見てきた それは

絶望も希望も住む場所をもたぬところ

未来や過去がうろつくには

30 すこしばかり遠いところ 狼の影もないところ

どの首都からもべだたつた どんな地図にもないところだ

ひろい廣野に向かう魂が

……どうして敗北を信することができようか

かわいたとび色の風の中で

35 からつばの水筒に口をあてて

- 消えたいのちの水をのんでいる兵士たちよ  
 きみたちは もう頑強な村を焼きはらったり  
 奥地や海岸で 抵抗する住民をうちこらす必要はない  
 死の穢りいれがおわり きみたちの任務はおわったから  
 40 きみたちは きみたちの大なる真昼をかきけせ！  
 白くさらした骨をふきよせる夕べに  
 死霊となつてさまよう兵士たちよ  
 きみたちのいない暗い空のあちらこちらから  
 沈黙よりも固い無名の木の実がはじけとび  
 45 四月の雨をまつ士にふかく射ちこまれている  
 おお しかし……  
 森や田畑やうつくしい町の視覚像はいらない  
 ぼくはぼくの心をつなぎとめている鎖をひきずつて  
 ありあまる孤独を  
 50 この地平から水平線に向けてひつばつてゆこう  
 頭上で枯れ枝がうごき つめたい空気にふれるたびに  
 榴散弾のようにふりそそぐ淋しさに耐えてゆこう  
 歌う者のいない咽喉と 主催者のいない胸との  
 血を吐く空洞におちてくる  
 55 にんげんの悲しみによこれた夕陽をすてにゆこう  
 この廣野の果てるまで  
 ……どこまでもぼくは行こう  
 ぼくの行手ですべての国境がとざされ  
 弾倉をからにした心のなかまで  
 60 きびしい寒さがしみとおり  
 吐く息のひとつひとつが凍りついて  
 おお しかしどこまでもぼくは行こう  
 勝利を信じないぼくは どうして敗北を信ずることができようか  
 おお だから 誰もぼくを許そうとするな。

(鮎川信夫「兵士の歌」、『鮎川信夫全著作集』昭和四八〜五一年、思潮社刊、一部を現代仮名遣いに変更)

(注) 鮎川信夫 (一九二〇〜九八年) 詩人・評論家。一九四二年兵役のため大学中退。四三年スマトラ転属。四四年、傷病兵として帰還。代表作に「死んだ男」「鮎川信夫詩集」などがある。

おのれ自身に擬する銃口 自分に向けて、銃口をあてがうこと。

榴散弾 弾体内に多くの散弾があり、炸裂して人馬を殺傷する砲弾。